

『魔法少女まどか☆マギカ』論 希望と絶望、二つの共感のすれ違い

荻野将太

〈目次〉

第 1 章	はじめに	2
1.1	研究概要	2
1.2	研究の動機	2
第 2 章	『まどマギ』の紹介	3
2.1	『まどマギ』の概要	3
2.2	『まどマギ』のあらすじ	3
第 3 章	「セカイ系」と『まどマギ』	5
3.1	『まどマギ』の先行研究	5
3.2	「セカイ系」とは何か	5
3.3	『まどマギ』はセカイ系か	7
第 4 章	斎藤環による『まどマギ』評	9
第 5 章	『まどマギ』が描いたもの	10
5.1	三界理論の導入	10
5.2	『TV 版』で起こったこと、『叛逆の物語』で起こったこと	11
5.3	ほむらの「愛」	11
5.4	出会いからまどかによる宇宙改変まで：まどかの現実界的存在に対する共感	12
5.5	まどかによる宇宙改変から『叛逆の物語』中盤まで：まどかの象徴界的理想に対する共感	14
5.6	『叛逆の物語』中盤以降：まどかの現実界的存在に対する共感と象徴界的理想に対する共感	14
5.7	まどかとほむらの自己愛の獲得経緯に見る物語の背景	16
5.8	まとめ：結論と今後の展望	18
参考文献	20

[キーワード] 共感、自己愛、ゼロ年代、セカイ系、ループもの、ラカンの三界理論

第1章 はじめに

1.1 研究概要

本研究は、アニメシリーズ『魔法少女まどか☆マギカ』（新房 2011）（以下：『まどマギ』）が、人間の持つ「共感」作用を二種類に分類し、そのすれ違いを描いた作品であったということを明らかにすることを目的としている。またその過程において、従来『まどマギ』が論じられる際に参照されていた「セカイ系」という作品類型と本作を改めて比較し、その是非を再考・批判し、新たな『まどマギ』像を提示することも本研究の意義である。

以降の第2章では、導入として『まどマギ』の概要やあらすじの紹介を行う。またこの章は『まどマギ』が現在の日本のサブカルチャーに与えた影響の大きさや評価の高さを紹介することで、本研究の価値・重要性の確認も兼ねている。

第3章では、『まどマギ』の先行研究について簡単に紹介したのち、その中で触れられる「セカイ系」というジャンルについて考察し、その上で先行研究に対する批判を行う。

第4章では、作品分析の準備段階として、サブカルチャーに精通した精神科医の斎藤環による『まどマギ』評を参考にして要点を抜き出す形で紹介し、その論旨を整理する。

第5章では、『まどマギ』の作品構造をより詳細に掴むため、ラカンの三界理論を応用する形での考察を試みる。その上で、本作が二種類の共感を前提にそのすれ違いを描いた作品であるということを論証するため、登場人物の作中での言動やその描かれ方を紹介して吟味することにより議論を進める。また、その議論を通じて得られた上記の結論を再度セカイ系の構造と比較することにより、『まどマギ』が如何にセカイ系と異なっているかをここで再度確認する。

1.2 研究の動機

『まどマギ』を初めて視聴したとき、私は衝撃を受けた。TV アニメ全12話と劇場版1作のみとは思えないほど充実した内容に、一切無駄のない展開、次々に予想を裏切る形で明かされる物語の真相など、何もかもが感激するほど面白いと感じた。あまりの面白さから本作について調べ始めた私は、『まどマギ』が多くの人から非常に高く評価されていることを知り、これだけの評価を受ける作品には何か普遍的な魅力があるに違いないと考えた。本研究の主な動機は、この普遍的な魅力の正体を突き止めたいと強く感じたことである。また、詳細は第3章で後述するが、本作について調査している中で『まどマギ』はセカイ系をはじめとしたゼロ年代に見られる作品の要素を総まとめにした作品であると評する見解が見られた。しかし、私にはその評価が本作の魅力完璧に表現できているようには思えず、『まどマギ』にはその面白さを裏付けるオリジナルの“何か”が絶対にある。」と確信を抱いていた。この確信を論理的に説明することが本研究にとって非常に重要なポイントとなると感じ、これが本研究の方針を固める主な動機となった。

第2章 『まどマギ』の紹介

2.1 『まどマギ』の概要

『まどマギ』は、アニメ制作会社シャフトによって制作され 2011 年に放送された TV アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』(以下:『TV 版』) 全 12 話に始まるシリーズ作品である。本作はタイトルに「魔法少女」という言葉を冠しているが、その実態はシリアスな展開が続くダークファンタジーであり、従来の「魔法少女もの(セーラーMoonシリーズやプリキュアシリーズなど)」の“お約束”を次々に裏切る形で物語を進め、当時の視聴者に大きなインパクトを与えた¹。二年後の 2013 年には『TV 版』の続編である映画『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ [新編] 叛逆の物語』(新房 2013)(以下:『叛逆の物語』)が公開され、深夜アニメ発の劇場作品としては当時初めて興行収入 20 億円を記録した(WEB サイト①)。2022 年時点で、他にも複数のスピンオフ作品がメディアミックス展開されている他、『叛逆の物語』の正当な続編となる劇場版の新作も制作が決定している(WEB サイト②)が、現時点でのメインシリーズは上記の二作品で構成されている。本作は、2011 年という、ゼロ年代(2000 年代)とテン年代(2010 年代)の転換期に、当時の「Blu-ray における TV アニメシリーズ作品の中で最高の初動売上を記録」(WEB サイト③)するほどの大ヒットを取めたということもあり、日本サブカルチャー史において大きな意味を持つ作品であると言える。

2.2 『まどマギ』のあらすじ

以下に、本論の内容把握補助のため『TV 版』と『叛逆の物語』それぞれの大まかなあらすじを紹介する。

①『TV 版』あらすじ

女子中学生の鹿目まどか(図 1 中央)は、ある日、願い事を一つだけ叶える代わりに「魔法少女」になってほしいと言う謎の生き物キュゥベえ(図 1 まどかの肩の上)と出会う。キュゥベえによると、世の中には、人々に不安や憎しみを振りまいて絶望に陥れる「魔女」(図 2)という怪物のような存在がおり、魔法少女とは、その魔女と戦い世界に希望をもたらす使命を帯びた少女のことであるという。

まどかは先輩魔法少女の巴マミ(図 1 右から 2 番目)に対する憧れや、人のためになることがしたいという思いから何度か魔法少女になる契約を結ぼうとするが、その契約はつい先日転校してきた魔法少女である暁美ほむら(図 1 左から 2 番目)によってことごとく阻止されてしまう。

その後様々な事件を経て、魔女は極限まで絶望した魔法少女が変異した姿であるということ、キュゥベえはその際に発生する莫大な感情をエネルギーとして回収するため地球に來訪しているという真相が明かされる²。

また、ほむらは、その事実を知らないまどかが魔法少女にならないようにするため別の時間軸(世界線)からやってきたということが判明する。ほむらはまどかを救うことだけを目的に何度も同じ時間をループしたため、複数の時間軸の「因果」が全てまどかに収束していた。その結果、まどかに秘められた魔法少女としての潜在力は強大なものになっていた³。

最終的にまどかはその潜在力を活かし「全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい。」という願いを叶えて魔法少女になり、宇宙の法則を書き換え、「円環の理」という概念的存在となる。「円環の理」として魔法少女を魔女化する寸前に救済するという役目を背負ったまどかは、世界から人間としての自分の存在を消すこととなる。まどかによって改変された世界の中で、唯一人間としてのまどかのことを鮮明に記憶しているほむらは、「円環の理」による救済（＝まどかとの再会）の時まで戦い続ける⁴。



図1 魔法少女とキュウベエ
(出典：WEB サイト④)



図2 薔薇園の魔女
(出典：WEB サイト⑤)

②『叛逆の物語』あらすじ

ある朝、晓美ほむらは（初対面のような演出で）転校生として鹿目まどかと出会う。二人は他の魔法少女らと共に「ナイトメア」と呼ばれる敵を討伐する生活を続けるが、しばらくしてほむらはその日常や世界に疑念を抱くようになる。

まどかは過去（TV版終了時点）に「円環の理」となったはずであり、まどかが人間の形で存在しているこの世界は本来あり得ない。このことに気づいたほむらは、今過ごしている偽物の世界を作り出せる人物を追及し元の世界を取り戻そうとする。

ところがその過程で、そもそもまどかが存在する現在の世界を作り出すことができるのは、まどかによる宇宙改変後にまどかのことを知っている人物、すなわちほむら自身のみであることに気づく。この偽物の世界はほむら自身が作り出したものであると判明し、またそれと同時に、ほむらは自分が既に魔女になりつつある⁵ことを認識することとなった。

その後、偽物の世界は破壊され、「円環の理」としてのまどかがほむらを迎え救済しようとした瞬間、ほむらが逆に「円環の理」から人間としてのまどかの部分を引き剥がしてしまう。途端に宇宙の法則は再度ほむらによって書き換えられていき、まどかが「円環の理」としてではなく人間として生活することができる世界が生み出された。この行動に至ったほむらは自らを「神（円環の理）」に叛逆した「悪魔」と称する。その原動力となった感情は、魔法少女としての希望でも魔女としての絶望でもなく、まどかのためだけの「愛」だった。

第3章 「セカイ系」と『まどマギ』

3.1 『まどマギ』の先行研究

『まどマギ』は、2011年というゼロ年代とテン年代の狭間にあたる時期に放送され大ヒットを収めたことから、それぞれの世代に流行したジャンルと比較して論じられてきた。たとえば、評論家の宇野常寛は本作について「『戦闘美少女』、『セカイ系』（君と僕の関係性が世界の危機などという大きな問題に直結するような作品）、『ループもの』、『百合（同性、特に思春期の女性間の恋愛関係）的な要素』といった、この10年間のアニメの要素の良い所取りをうまくやっていた」（WEBサイト⑥、⑦）と評している。たしかに、本作は魔法で戦う美少女の物語であるという「戦闘美少女もの」の要素を持っている。また、主要キャラクターのほむらがまどかのために何度も時間遡行をするという「百合」要素の入った「ループもの」であることは疑いようがないだろう。ところが、本作が「セカイ系」であるという点については議論の余地があると私は考える。そこで、次節では「セカイ系とは何か」について先行研究を参考にしつつ紹介し、『まどマギ』との関わりについて論じていく。

3.2 「セカイ系」とは何か

セカイ系とは、2000年代（ゼロ年代）に流行した日本のサブカルチャー作品ジャンルの一つである。しかしこの言葉の定義については、流行当初から2022年の今に至るまで様々な議論がなされてきたものの、未だ決定的な結論は出しておらず、明確な定義がないままである。たとえば、東浩紀は著書『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン 2』（2007）でセカイ系を「主人公と恋愛相手の小さく感情的な人間関係（「きみとぼく」）を、社会や国家のような中間項の描写を挟むことなく、「世界の危機」「この世の終わり」といった大きな存在論的問題に直結させる想像力」（東 2007:96-97）と定義している。この定義は当時サブカルチャーを論じる批評家として注目を集めていた東が提起したことで広く知られることになり、今でもセカイ系について論じる際は頻繁に用いられる定義の一つとなっている。

これに対し前島^{まえじまさとし}賢は著書『セカイ系とは何か』（2010）で、セカイ系の代表作とされる高橋しん『最終兵器彼女』、新海誠『ほしのこえ』、秋山^{あきやま}瑞人『イリヤの空、UFOの夏』ですら「セカイ系の定義に当てはまらない」（前島 2010:10）と述べ、東による定義を一旦破棄する。前島はTVアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』以降の作品の多くが『エヴァ』の影響を受けているとして、その「エヴァっぽさ」（＝「自意識を描写」（前島 2010:115）するなどの特徴）を受け継いで、詳細な世界設定が排除された作品をまとめてセカイ系と称した（前島 2010:114-115）。ところが前島は前述の東による定義を完全に否定したわけではなく、2004年以降には「この定義自体が、新たなセカイ系を作り出していく」（前島 2010:121）と述べている。すなわち前島によると、セカイ系という言葉の定義は、セカイ系に関する議論を経ることで変容しており、それが更にセカイ系に関する議論を混乱させているのだとい

う。またこの状況に対して前島自身も、『セカイ系とは何か』では、今後用いられるに値するようなセカイ系の特徴を包括的に表す定義を示したわけではなかった。その結果として、未だにセカイ系の定義は曖昧なままとなっているのだ。こうした現状を踏まえた上で、後の議論を円滑に行うため、サブカルチャーのジャンルで平均的に用いられているオンライン百科事典「ニコニコ大百科」で挙げられており、筆者が妥当と考えたセカイ系の大まかな特徴（WEB サイト⑧）を以下に紹介し、これらを参考にここで大まかな定義を仮定する⁶。

1. 物語は主人公とその周辺のみで展開する。
2. 主人公は世界の危機などの世界規模の問題に関わることになる。
3. 主人公は世界の危機に向き合うと同時に日常生活も送っている。
4. 主人公とヒロインまたは主人公周辺の人物との関係性が世界の危機に直結する。
5. 主人公は世界の危機の解決とヒロインの命の二択を迫られる。
6. 主人公の精神世界や心情描写、要するに自意識の話が重視される。

前島の考えによると、ニコニコ大百科の 6 つの特徴のうち 1～5 はセカイ系にとって必須のものではなく、最も重要なのは 6 つめの「自意識の話が重視される」という部分であるとされる。では、1～5 がセカイ系の成立に一切必要ない要素であるかという点を決してそうではない。単に自意識にまつわる描写が為されるだけではセカイ系とは呼べないのだ。セカイ系の物語は、1～5 の特徴で示されているように、主人公とヒロインが世界の危機に不可避的に巻き込まれることで展開される。その中で強調されるのが、「あまりに大きすぎる世界の動きに対して為す術がなく、どう足掻いても自分の力で世界を変えることはできない」という主人公の「無力感」である。その結果、世界の危機に対して積極的にアプローチすることを諦め、ただ受動的にその変動を眺めながら、ヒロインとの「きみとぼく」という二人の関係に閉じこもるといのがセカイ系の構図だ。そして二人だけの閉鎖的な関係を築く中で主人公は己の無力さを嘆き、その無力な自己の存在、すなわち自意識に関心が向く。つまり、前島がセカイ系の定義と主張するような「6. 主人公の精神世界や心情描写、要するに自意識の話が重視される。」というセカイ系の特徴は、1～5 のような世界の動向が主人公らに否が応でも影響を与えるという描写があって初めて成立するものなのである。

この点を具体例と照らし合わせて確認するため、ここでセカイ系の代表作とされる漫画『最終兵器彼女』（高橋 2000-2002）のあらすじを紹介しよう。

主人公である男子高校生のシュウジは同じ高校に通うヒロインちせとの交際を始めるが、実はちせは自衛隊によって「敵」と戦うために人体改造を施された「最終兵器」だった。ちせの心身は戦闘で殺戮を重ねるにつれ兵器へと同化していき、彼女の人間性は失われていく。シュウジはどうかしてちせを助けようとするが、一学生でしかないシュウジには結局どうすることもできず、己の無力さを嘆くしかなかった。その後、激化した戦いの末に地球はほぼ完全に壊滅する。戦いの中で完全な兵器と化してしまったちせは最終的に宇宙船のような形になり、シュウジを乗せて滅びゆく地球から脱出する。何もかもが崩壊した地

球を後にし、シュウジとちせは二人だけで生きていくのだった。

以上が『最終兵器彼女』のあらすじだが、「抗いようのない世界の変動が主人公とヒロインの関係に直結し、その中で無力さを嘆いた主人公がヒロインとの二人だけの閉鎖的な関係に閉じこもる」というセカイ系の構図が明らかに見て取れるだろう。

3.3 『まどマギ』はセカイ系か

では、以上の議論を踏まえ、『まどマギ』はセカイ系にあたる作品と言えるだろうか。たしかに、『TV版』においても『叛逆の物語』においても、まどかとほむらという二人のミクロな関係性が、宇宙の法則の書き換えという極めてマクロな事象の話に飛躍するため、セカイ系的な要素が示唆されているように受け止められる。しかし、実は『まどマギ』においては、上記で挙げたセカイ系の大きな特徴とされる「世界の危機」や、「世界の危機の解決とヒロインの命の二択を迫られる」ような状況は訪れていない。『まどマギ』作中には最大の敵として「ワルプルギスの夜（舞台装置の魔女）」が登場するが、この敵は登場時点では世界を滅ぼすほどの力を持っておらず、十分に避難が可能な程度の脅威だった。また、この敵は一種の災厄のようなものと位置づけられており、この敵と戦うことは不可避の義務ではない。このことを明らかにするために、『TV版』第10話で最初に描かれた時間軸で、まどかが「ワルプルギスの夜」に立ち向かう直前のまどかとほむらの会話を紹介する。

まどか「じゃあ、行ってくるね。」

ほむら「えっ、そんな、巴さん、死んじゃったのに…。」

まどか「だからだよ。もうワルプルギスの夜を止められるのは、私だけしかいないから。」

ほむら「無理よ！一人だけであんなのに勝てっこない！鹿目さんまで死んじゃうよ？」

まどか「それでも、私は魔法少女だから。みんなのこと、守らなきゃいけないから。」

ほむら「ねえ、逃げようよ…だって、仕方がないよ…誰も鹿目さんを恨んだりしないよ…。」

この会話から分かるように、まどかには逃げる余地があり、ほむらに制止されていたにもかかわらず、自ら「ワルプルギスの夜」との戦いに出向いたのである。

また、第12話でまどかが魔法少女になって宇宙の法則を書き換えると決断した際も、彼女はほむらの制止を振り切って自ら魔法少女になるという選択をしている。すなわち、まどかが自分を犠牲にしてまで「ワルプルギスの夜」と戦い、そして宇宙を改変するに至ったのは、決して必要に迫られた結果ではない。まどかには「魔法少女を救いたい」という強い意志と、その源となっている全ての魔法少女への強い“共感”という特性があったため、自ら進んでそのような選択をしたのである。この点において、「世界の危機に自らの意思ではどうしようもなく不可避的に巻き込まれた結果、必要に迫られて致し方なく犠牲を選択する。」というセカイ系のロジックと『まどマギ』の構造は大きく異なっていることが分かる。

そして、もう一点まどまぎとセカイ系で大きく異なっているポイントがある。それはまどかとはむらの関係性が「きみとぼく」というシンプルな一対一の関係に収まっていないという点だ。ここにはもちろん百合的な同性同士の関係であるということも関係していると思われるが、それよりもまどかがほむらに対して個人的な執着をもっていないという点が重要である。つまり、ほむらの共感ほむらという一人の人間に対して強烈に向いているが、まどかの共感ほむら世界全体へと向けられている。セカイ系のような二者間の閉じこもった関係は成立していないのだ。

ところで、前島は『セカイ系とは何か』にて『まどまぎ』について次のように述べ、『まどまぎ』をセカイ系作品として大きく評価する。「『魔法少女まどか☆マギカ』は、『スマガ』⁷と並んで、セカイ系と名指された諸作品（中略）のなかで語られてきた主題の集大成と言える作品だった。」（前島 2010:234）しかし、それと同時に前島は次のようにも述べている。「各話 30 分、全 12 話というけして長くない物語の中にこうした主題（セカイ系の要素）をまとめるためには、要素の大胆な取捨選択が必要とされ、そこから零れ落ちた要素も皆無ではない（例えば、本書がセカイ系のコアと指摘した「少年の自意識」については、ほぼ完全に消失している。」（前島 2010:235）果たして前島はここで何を主張しているのだろうか。前島は自身が述べている通り、セカイ系においては自意識の描写が重要だと指摘していた。その後、東らがしたようにセカイ系には様々な定義が与えられ、それを経てセカイ系というジャンルが変遷したというのも前述したとおりである。しかしそれを受けても前島は「セカイ系は、時にその定義はしばしば大きく変わったが、しかし「私」を巡る問題系であるという点は、変わらなかった。」（前島 2010:214）として、セカイ系作品に「自意識」の問題が必要不可欠であることを主張している。そうであるならば、自意識の問題がほぼ完全に消失した『まどまぎ』をセカイ系の集大成として分類するのは論理が破綻しているのではないだろうか。実際、前島が指摘したように、『まどまぎ』では無力な少年（少女）の自意識についてはほぼ一切描かれぬ。これはすなわち『まどまぎ』は、ニコニコ大百科の定義を前提としつつ核心を絞った前島の定義に則ったとしても、セカイ系とは言えないと考えられるのである。

以上を踏まえて考えると、『まどまぎ』はゼロ年代的・セカイ系的な要素を示唆する作品ではあるが、そういった要素は本作の本質的な部分とは言えないという考えに到達する。むしろ、そういったゼロ年代的な枠組みにあてはめてしまうことによって見逃されている重要なエッセンスが本作にはあり、私たちがより詳細に考察すべきはそこなのだと考えられるだろう。では、その重要なエッセンスとは何だろうか。言い換えるならば、『まどまぎ』とはどのような物語で、何を本質的に描いた作品だったのだろうか。

ここで結論を先取りすれば、『まどまぎ』は二種類の「共感」のすれ違いを描いた作品であると言える。この点を明らかにするため、以下では『まどまぎ』がどのような世界観・構造のもとで繰り広げられた作品であったかを改めて検討し明確にしていくこととする。次章ではその第一段階として、斎藤環が『まどまぎ』について論じた記述を要約する形で紹介し、その論旨を考察する。

第4章 斎藤環による『まどマギ』評

斎藤環は『ユリイカ 11月臨時増刊号 第43巻第12号 総特集=魔法少女まどか☆マギカ—魔法少女に花束を』（2011）で、「まどか☆エチカ、あるいはキャラの倫理」と第して『まどマギ』評論を記している。

斎藤がまず指摘するのは、『まどマギ』の世界観は「感情があたかも貨幣のように取り扱われている」（斎藤 2011:39）という点において、単純なセカイ系と異なっているということである。斎藤は、漫画やアニメといった表現形式において物語を駆動するのは「感情」であるとす。これは、意志や欲望、論理など人間の「動機」を構成するエレメントは「感情」として表出されることによって漫画やアニメの物語を進行させるということを意味しており、この点を踏まえて斎藤は漫画・アニメのような物語を「感情消費」システムと表現した。斎藤は、『まどマギ』はこの点をメタ的に捉えた作品であると推察し、そうであるならば、『まどマギ』が傑作である理由は感情のエコノミカルな循環を夢オチ的に終わらせず、物語として完結させた点にきわまるとしている（斎藤 2011:40）。

次に斎藤は、まどかによる世界の改変という大どんでん返しが何故成立し得たのか、言い換えると、それが何故物語の完結としてふさわしいと言えるのかについて解説する。まどかの世界改変は「魔法少女が魔女にならないようにする」という願いによって遂行されたが、この願いは魔法少女システムに対して自己言及的であり、システム自体の根本を揺らがせるものであった。言い換えるならば、この願いは、システムにおける論理階梯を一段階上昇させたメタ的なものであったのだと斎藤は言う。このような、システム内のオブジェクトレベルで解決不可能な問題を、システムを超越したメタレベルに上昇させることで一気に解決してしまう結末は、通常「夢オチ」にあたると斎藤は指摘する。「夢オチ」とは物語の最後に「今まで起こったことは全て夢だった」と明かすこと、あるいは夢でなくとも、物語の根底にある前提を覆して完結することを意味する言葉である。「夢オチ」は物語のリアリティを損なうため読み手（視聴者）に興ざめな印象、脱臼感を与えるものだが、斎藤は『まどマギ』にはそのような脱臼感はなくむしろ感動的でしたらあつたと言ひ、その理由を「まどかが『キャラの消滅（=あらゆる世界における同一性を破棄する）』という犠牲を払ったから」とした。斎藤は「夢オチ」の問題を、キャラの同一性が変わらずに世界が変わる点にあるとし、「キャラと世界設定の間に、なんらかの等価交換的な原理が存在することを示唆し得た点」（斎藤 2011:49）に『まどマギ』の画期性があるとした。

以上が『TV版』について斎藤が語っていたことだが、この評論はまだ『叛逆の物語』が公開されていない2011年に書かれているものであり、斎藤は『TV版』の結末を以上のよう評していることから「本作の「スピンオフ」はありえても「続篇」は不可能だろう」（斎藤 2011:40）と述べていた。

ところが斎藤の予想に反し、2013年には『叛逆の物語』が公開される。斎藤は、『叛逆の物語』についても著書『おたく神経サナトリウム』（2015）で論じている。斎藤は『叛逆の物語』の終盤にほむらによる宇宙の改変を『TV版』でのまどかの宇宙改変と比較して次の

ように述べる。「すべての魔法少女を救うために自らのキャラを消去したまどかは概念≒神となった。しかし、自らの欲望を実現するべく、キャラを犠牲にすることもなく世界設定を書き換えたほむらは必然的に悪魔となる。見事な対比だ。」(斎藤 2015:308-309)

斎藤は『TV版』の結末ではまどかの犠牲によって「夢オチ」が回避されたと述べていた。それを前提に考えると、『叛逆の物語』における犠牲を伴わないほむらの世界改変は「夢オチ」的であるということになるだろう。つまり、キャラの倫理を貫くならば、キャラの同一性を維持したまま世界を書き換えた『叛逆の物語』の結末は、本来「夢オチ」的な脱臼感を与えるはずなのだ。しかし本作は、『TV版』で「神」となったまどかに対比される形でほむらが「悪魔」になるという表現をすることによって、キャラの倫理への違反に自覚的になっている。これによりキャラの倫理は逆説的に維持され、その成果として「夢オチ」的な脱臼感は本作でも回避されているのだ。以上が、斎藤による『まどまぎ』評論の概説と、それに基づいて私が考察した本作の構造である。

しかし、『叛逆の物語』が『まどまぎ』の一旦の終着点として描いたのは、「悪魔」という設定による整合性の破綻の回避だけに留まるのだろうか。私は、この作品が、『TV版』の地続きの続編としてもう一つ重要な意味を持っていると考える。次章ではこの点も含め、『TV版』と『叛逆の物語』を通じて『まどまぎ』が描いたことの本質について考察する。

第5章 『まどまぎ』が描いたもの

5.1 三界理論の導入

斎藤の論から『まどまぎ』が感情をベースにした世界観・構造を持っていることが明らかとなったが、ここではその構造をより詳細に考察していきたいと思う。斎藤は本作の感情の在り方を単に「価値」としてしか説明しなかったが、ここにラカンの三界理論を応用して考えると、魔法少女システムは更に普遍的な説明を以て理解できるものであることが分かる。

ここでは、ラカンの三界理論をまどかにおける共感とほむらにおける共感を区別するために用いる。現実界、想像界、象徴界をここでは簡略し、個人の実存の構成要素としてつぎのように位置づける。現実界は、物理的な身体そのものの水準、想像界は他者及び自己へのイメージと共感作用の水準、そして象徴界は、人間が成長するにしたがって参入する言語秩序およびそれに基づく社会システムの水準を表す。個人はこの三界に跨った形で自我を形成しているが、それぞれの水準への傾きや親和性には個人差がある。

これを踏まえると、魔法少女としての活動には、「他人の為に力を使うべき」という理念的な側面、すなわち象徴界に値する側面を持っていると言える。つまり魔法少女の「希望」とは、この象徴界に対する意識的欲望（共感・想像力）と言える。領域としては象徴界と想像界の重なり合う領域であるが、ベクトルとしては象徴界へ向かう想像界的な欲望、象徴界志向の共感であると言える。そして、その意識的な欲望を遂行する過程で溜まりに溜まった（＝抑圧された）身体的・現実界的存在に対する無意識的欲望（共感・想像力）が魔女に陥る「呪い」や「絶望」であると言えるのだ。これは希望とは逆に、ベクトルとしては現実界

へ向かう想像界的な欲望、現実界志向の共感であると言える。以下のように簡略化して定式化しておく。

「希望」＝象徴界志向の共感

「絶望」＝現実界志向の共感

5.2 『TV版』で起こったこと、『叛逆の物語』で起こったこと

ここで一度、『TV版』と『叛逆の物語』の結末がいかなるものであったかについて前節の理論を用いつつ大まかにまとめようと思う。

まどかは『TV版』の展開では、キュウベエの象徴システムを書き換え、現実界としての身体と、まどかという人間の人となりを表す想像界を失い、「円環の理」という象徴界としての存在のみが残ることになった。まどかは、魔法少女システムという既存の象徴的法則の中においては避けられない運命をどうにか回避できるようにしたいという願いを叶えることで魔法を使えるようになるが、その願いはシステムそのものを変えてしまうことを意味していた。結果、システムを書き換えには成功するが、それによって身体（現実界）を失う。身体という基盤を失うことで、まどかの共感（想像界）の領域は新しい象徴システムに吸収されてしまい、まどかは非個性化・非個体化された、完全に普遍的な機能となってしまった。この結果を受け、ほむらはまどかの決意を尊重して戦い続けるという描写で『TV版』は完結する。ところが、『叛逆の物語』では、ほむらの作った結界の中でまどかが「みんなと一緒にいたい」という趣旨の発言をしたため、ほむらはまどかの身体を取り戻すことを決意する。ほむらはシステムよりも「身体をもつ人間としての在り方」を重視した。当初の戦い続けていた頃のほむらは、まどかの「秩序を重視する側面（象徴界）」に共感していたが、『叛逆の物語』ではまどかの「身体の側面（現実界）」に共感の対象が移ったと言えるだろう。

では、上記のような結末はどのような必然性を持って迎えられたのだろうか。そしてそれはどのような意味を持っているのだろうか。この点を明らかにするため、次節では作中の様々な場面での彼女らの会話や行動を取り上げながら、その経緯を検討する。

5.3 ほむらの「愛」

まず私が注目するのは、『叛逆の物語』の最終盤、ほむらが宇宙改変を行うシーンで、キュウベエとの会話の中で発せられた「愛」という言葉である。以下にその会話を一部書き起こす。（台詞引用中傍点強調は筆者による、以下同）

ほむら「思い出したのよ。今日まで何度も繰り返して、傷つき苦しんできた全てが、まどかを思っていたことだった。だからこそ、今はもう痛みさえいとおしい。私のソウルジェム⁸を濁らせたのは、もはや呪いでさえなかった。」

キュウベエ「それじゃあ、一体…？」

ほむら「あなたには理解できるはずもないわね、インキュベーター。これこそが人間の感情の極み。希望よりも熱く、絶望よりも深いもの、『愛』よ。」

（※インキュベーター＝キュウベエ）

会話中の傍点部が私の注目しているポイントだが、このほむらの台詞の趣旨は、“自身の時間遡行（タイムループ）は全てまどかのためだけに行っていたとして、そこで募らせた感情はまどかへの「愛」であった”ということである。

まずは何故この台詞に注目すべきかについて説明する。上述したあらすじからも分かるように『まどマギ』はまどかとほむらという二人の少女が中心となってストーリーが展開されている。中でも特に、『TV版』の第10話で、ほむらがまどかのために何度も同じ時間をループしていたということ、そして第1～9話までの展開は全てその第10話での出来事を経た上でのものであったということが判明してからは、主にほむらの視点で物語が進行する。そして『叛逆の物語』を終えた現時点での『まどマギ』の終着点は、ほむらによって宇宙が二度目の改変を施されたところである。つまり『まどマギ』という作品は、ほむらの行動から動き始め、ほむらの行動によって一度終えられた物語なのだ。この、作中で最も中心にいる人物であるほむらが抱いた感情やそこから発された言葉に注目することは、「価値化された感情がエネルギーとして世界に作用する」という作品の構造上、『まどマギ』全体がどのような物語であったかを考えることに直結していると言えるのである。またこの台詞は、作中のクライマックスシーンでほむらが宇宙の改変という行為を成し遂げた際の心情の吐露であるため、特に重要なものであることは言うまでもない。

そしてもう一点、この「愛」という言葉は、『まどマギ』の構造に新たな視点を与えるものであるということも重要だ。前述の通り、本作の構造の軸には、「象徴界志向の共感（希望）」とその反動として形成される「現実界志向の共感（呪い・絶望）」という二種類の共感の作用がある。『TV版』第12話にてまどかが宇宙のシステムを改変した後の世界においても、この点は変わらなかった⁹。ほむらは自身の「愛」がその「希望」／「絶望」という魔法少女システムの根幹たる二種類の感情（共感）よりも「熱く、深い」ものであると表現している。では、ほむらはこの二種類の共感という原則を完全に放棄してしまったのだろうか。実はそうではない。ほむらの「愛」には、それまで決して相容れなかった二種類の共感が共存しているのである。すなわち、「象徴界志向の共感」と「現実界志向の共感」である。元々は相反するものとして描かれていた二つの共感が同時に成立するという描写を、「愛」という複雑な意味を持つ言葉で説明したこの台詞は、本作の構造について、より踏み込んで考察する機会を与えたのである。

では、ここからは、その両義性を孕んだほむらからまどかへの「愛」の実態を明らかにする。ほむらのまどかに対する共感のモードの変化を時系列を追って確認していき¹⁰、最後にほむらが至る「愛」の構造を定式化する。

5.4 出会いからまどかによる宇宙改変まで：まどかの現実界的存在に対する共感

まず、ほむらがまどかと出会って以降、『TV版』終盤のまどかによる宇宙改変までは、ほむらは一貫してまどかに人間として生きていてほしいと思っているということが様々な場面から読み取れる。

ほむらが初めてまどかと出会ったのは、『TV版』第10話でほむらがまどかの通う見滝原

中学校に転校してくるシーン。この時間軸では、まどかは既に魔法少女になっており、当時自分に自信が持てなかったほむらを励ますなど親切に接していた。程なくして、彼女らの住む街に「ワルプルギスの夜」という名の最強の魔女が襲来する。まどかは魔法少女としての宿命を果たすため「ワルプルギスの夜」に挑むが、敗北し、死ぬ。第3章で引用したように、この場面でほむらは戦いに向かおうとするまどかに対して「ねえ、逃げようよ…」と言ってまどかを制止しており、また戦死したまどかに対しては「どうして…？死んじゃうって、分かったのに…。私なんか助けるよりも、あなたに、生きててほしかったのに…。」と語りかけていた。

そして、このシーンはほむらが魔法少女になる場面でもあるが、そこで叶える願いは「鹿目さんとの出会いをやり直したい。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい。」というものである。以上の台詞や叶えた願いの内容から考えて、この時点でほむらはまどかに人間として生きていてほしいという思いを抱いていることが分かる。

次にほむらのまどかに対する感情が大きく動く決定的な瞬間は、複数回の時間遡行を経た後のことである。ある時間軸でほむらとまどかは、魔法少女が魔女になるという運命を知りながら「ワルプルギスの夜」と戦うが、またも敗北。まどかに蓄積した呪いがほぼ極限状態になり、今にも魔女になりそうであるという状況が訪れる。そこでまどかはほむらに、「自分が魔女になる前に殺してほしい」、「過去に戻り自分がキュゥベえと契約して魔法少女にならないのをやめさせてほしい」という二つの頼み事をする。

まず前者の頼みを受けほむらは、自分が最も守りたいと考えているまどかを自らの手で殺し、時間遡行をする。それまで、まどかに生きていてほしいという一心のみで何度も時間遡行を繰り返してきたほむらにとって、自らの手でまどかの命を奪うことがどれほどの苦痛であったかは想像に固くない。また、後者の頼み事によって、ほむらが時間遡行を繰り返す理由に「自分がまどかを助けたいから」だけでなく「まどかに頼まれたから」という理由が新たに加わることとなった。自分を殺させた上で別の時間軸の自分の命を救ってほしいというまどかの言葉はほむらに強くのしかかり、ほむらを縛ることになる。要するにこのシーンは、ほむらがこれまで抱いていた「まどかに人間として生きていてほしい」という思いに、まどかによる要望に基づく側面が加わることになった場面なのだ。

そしてもう一つ、この段階でのほむらがまどかに人間として生きていてほしいと思っているということが分かるシーンがある。それは、『TV版』の第1話で交わされた以下の会話である。

ほむら「鹿目まどか。あなたは自分の人生が貴いと思う？家族や友達を大切にしている？」

まどか「え、えっと、わ、私は、大切、だよ。家族も、友達みんなも。大好きで、とっても大事な人たちだよ。」

ほむら「本当に？」

まどか「本当だよ！嘘なわけないよ！」

ほむら「そう。もしそれが本当なら、今とは違う自分になるうだなんて絶対に思わな

いことね。」

ほむら「さもなければ、すべてを失うことになる。」

まどか「え…？」

ほむら「あなたは、鹿目まどかのままでいればいい。今まで通り、これからも。」

この会話は、まどかが魔法少女になるのを阻止するために時間遡行をしたほむらが、まどかに対して魔法少女になることの意味——システムに取り込まれてエネルギーとして消費されるということ——を暗に示している場面である。ここでまどかは、自分の人生や家族、友だちの大切さについて戸惑いつつも答えている。この会話から、二人がまどかの人間としての人生を大切にしているという合意が少なくとも嘘ではないということが分かるだろう。また、この会話が為されたのは『TV 版』で描かれている最後の時間軸であり、ここから第 2～9 話と第 11 話、そして第 12 話でのまどかによる宇宙改変までほむらはこの思いを維持したままであった。

5.5 まどかによる宇宙改変から『叛逆の物語』中盤まで：まどかの象徴界的理想に対する共感

ほむらの「人間としての人生を歩んでほしい」というまどかへの思いが大きく動く出来事がある。それは、『TV 版』最終盤でまどかが「円環の理」になり世界から存在を消したこととことである。まどかが「円環の理」となる時、まどかはほむらの制止を振り切って「皆のために自分という存在を消す」という決断をした。ほむらはこのまどかの決断を尊重し、改変後の世界を守り続けると決意し、戦い続ける。このときの気持ちをよく表した台詞が『叛逆の物語』で語られる。それは、まだ自分が偽物の世界を作り出していると気づいていない時点で、偽物の世界について述べた「こんな茶番劇、まどかの犠牲を無駄にしているだけよ。許さない。」というものである。この台詞に違わず、『叛逆の物語』の劇中でほむらは偽物の世界を作った人物を突き止めようと奮闘するのであった。この時点でほむらが抱いているまどかに対する気持ちは、まどかが作り出したシステムとその意志の尊重、すなわちまどかの象徴界に対する共感だろう。

5.6 『叛逆の物語』中盤以降：まどかの現実界的存在に対する共感と象徴界的理想に対する共感

『叛逆の物語』の中盤のシーンで、ほむらは新たな真実を知らされる。それは、まどか本人のもう一つの本心だった。以下にその場面での会話を引用する。

ほむら「私ね、とても怖い夢を見たの。」

まどか「夢？」

ほむら「あなたがもう二度と会えないほど、遠い所に行っちゃって。なのに世界中の誰もかもがそのことを忘れちゃって…私だけが、まどかのことを覚えているたった一人の人間として取り残されて…。寂しいのに、悲しいのに、その気持ちを誰にも分か

ってもらえない…。そのうちにまどかの思い出は、私が勝手に作り出した絵空事じゃないかって、自分自身さえ信じられなくなって…。」

まどか「うん。それはとっても嫌な夢だね。でも大丈夫だよ。私だけが誰にも会えなくなるほど遠くに一人で行っちゃうなんて、そんなことありっこないよ。」

ほむら「どうして？なぜ、そう言い切れるの？」

まどか「だって私だよ？ほむらちゃんできえ泣いちゃうようなつらいこと、私が我慢できるわけじゃないじゃない。」

ほむら「あなたにとってもそれは我慢できないほどつらいこと？」

まどか「そうだよ。(中略)誰とだってお別れなんてしたくない。もし他にどうしようもない時だったとしても、そんな勇気私にはないよ。」

ほむら「…そう、そうだったのね…。それがあなたの本当の気持ちなら、私、なんてバカな間違いを…。やっぱり、認めちゃいけなかったんだ。あのとき(まどかが『TV版』第10話で魔法少女・円環の理になったとき)私は、どんな手を使ってでも、あなたを止めなきゃいけなかった……。まどか、あなたにはね、どれほどつらいことだと分かっているけど、それを選択できてしまう勇気があるの。あなたが、あなたにしかできないことがあると知った時、あなたは、自分でも気づいていないほど、優しすぎて、強すぎる……。私ね、知ってるんだよ。」

この会話は、「円環の理」としての記憶やそこに至った経緯などの記憶を失ったまどかと、その顛末全てを覚えているほむらによって交わされている。ほむらは何も覚えていないまどかに対して、『TV版』第12話で起こったことを自分の夢にたとえて説明しているのだ。この会話でほむらが確認したのは、まどかにとって自分の人生と周りの人を大切に思う気持ちが、「他にどうしようもなくともそれを捨てる勇気はない」と言えるほど強いものであるということだ。そして、これは同時に、まどかが『TV版』で行った宇宙の改変がどれほどの勇気をもって成し遂げられたことであったかを確認することにもなった。この二点を確認したほむらは、「円環の理」の機能は維持しつつ、そのシステムからまどかの人間としての部分を取り出すという形で宇宙をもう一度改変するという行動に出る。そのときに語られたのが、本章で私が最重要視している「愛」の台詞であった。

以上をまとめると、ほむらの言う「愛」は、①「まどかに人間としての人生を歩んでほしい」というまどかの現実界的存在に対する共感、②「まどかが自分の存在を消してまで作った世界のシステムを守る」というまどかの象徴界の理想に対する共感の二つが両義的に共存している心情を意味していると考えられる。そしてこの両義性を孕んだ「愛」は、システム的な側面と身体的な側面のどちらも諦めず、二つを両立させた理想的な世界を無理やり作り出すことに至ったのだ。

ところが、第4章で斎藤を参考にして述べたように、まどかのシステムはまどかの犠牲があつてこそのものであるため、その犠牲を取り消した上でシステムを維持するというのは破綻しているということになる。先に述べたように、これは斎藤に言わせればキャラの同一性が変わらずに世界が変わるという点において「夢オチ」的な状況であるのだ。しかしこの破

綻は、本作のプロットにおいて意図的なものであると思われる。このことは斎藤が指摘したようにほむらが悪魔になったという形で示されている他、以下に引用する会話——先に引用した第1話の会話と明らかに対比されている——でも示されている。

ほむら「鹿目まどか、あなたはこの世界が貴いと思う？欲望よりも秩序を大切にしている？」

まどか「それは、えっと、その、私は、貴いと思うよ。やっぱり、自分勝手にルールを破るのって、悪いことじゃないかな。」

ほむら「そう、なら、いずれあなたは、私の敵になるかもね。でも、構わない。それでも、私はあなたが幸せになれる世界を望むから...。」

この会話は、一切犠牲を伴わずに無理やり改変された理想的な宇宙が抱える不安定さを、まどかとほむらが後に敵対する可能性を仄めかすという形で暗示している。あえて不安定な状況を作り出した上で、そこに潜む問題点を浮き彫りにするこの場面は、決して『叛逆の物語』の結末が単なる「夢オチ」ではないことを示しているのだ。またこの描写は、共感のすれ違いを解決する難しさを、無理やり解決することによって生まれる不安定さを描くことで逆説的に示しているとも考えられる。

以上の議論をまとめると、『まどマギ』には共感が二種類あり、まどか／ほむらの両者にとってそのどちらもが大切であった。しかし、両者の重視するものが違っていたために二人の共感のすれ違い、このすれ違いを無理やり解決しようとしたほむらは二人の敵対という新たな悲劇の可能性を生み出してしまった。その悲劇の可能性は共感のすれ違いの解決の難しさを逆説的に示している。」と説明することができるだろう。

では、そもそも何故そのようなすれ違いが起きたのだろうか。ここには、二人が共通して抱えていた「自己否定」と、それが「自己肯定（ナルシズム、自己愛）」へと昇華されるに至る経緯の違いが強く影響していると考えられる。次節では、いくつかの場面を参照しながらこの点を検証する。

5.7 まどかとほむらの自己愛の獲得経緯に見る物語の背景

前節までに紹介した作中の言動などから分かるように、まどかとほむらが重視する共感の方向性は異なっており、対称的な人物像をもつキャラクターとして描かれている。ところが、二人には共通して描かれているものがあつた。それは「自己否定」である。詳細は後に紹介するが、まどかもほむらも自分の価値を認めることができずにいるシーンが描かれているのだ。一方、その自己否定を克服して「自己肯定（ナルシズム、自己愛）」を獲得するためのきっかけは両者で異なっている。実はこの点がまどかとほむらという二人における最も重要な違いであり、物語の顛末を決定づける違いなのである。それを確認するため、以下で二人の自己否定の克服と自己愛獲得の過程を辿る。

まず、まどかにとっての自己否定からの救済は、魔法少女システムという象徴的なものによって達成される。このことをよく表す言葉が『TV版』第3話で、まどか自身の口から

語られる。

まどか「私って、昔から得意な学科とか、人に自慢できる才能とか何もなくって。きつとこれから先ずっと、誰の役にも立てないまま、迷惑ばかりかけていくのかなって。それが嫌でしょうがなかったんです。でもマミさんと会って、誰かを助けるために戦ってるの、見せてもらって、同じことが私にもできるかもしれないって言われて。何よりも嬉しかったのはそのことで。だから私、魔法少女になれたらそれで願いごとは叶っちゃうんです。こんな自分でも、誰かの役に立てるんだって、胸を張って生きていけたら、それが一番の夢だから。」

この言葉は、まだ魔法少女になっていないまどかが、自分が魔法少女になるにあたって叶えたい願いについて述べたものである。システムを通じて誰かの役に立つことが「一番の夢」とまで言い切るこの台詞からも、まどかの象徴界志向の共感の強さが伺えるだろう。また、この台詞に込められた思いの強さは、別の時間軸のまどかによっても証明される。『TV版』第10話では複数の時間軸のまどかが登場し、そのほとんどが既に魔法少女になっている¹¹が、魔法少女になった後のまどかは、まだ魔法少女になっていない時点でのまどかよりも全体的に明るく快活に描かれている。たとえば、後に紹介する第10話でのまどかとほむらの会話は、5.4節で引用した「鹿目まどか、あなたは自分の人生が貴いと思う？」という台詞から始まる第1話の会話と全く同じ場所で交わされており明らかな対比になっているのだが、第10話で魔法少女として話しているまどかは堂々としているのに対し、魔法少女ではない第1話のまどかの態度はおどおどとしたものになっている。また、まどかは魔法少女として戦うことについて「平気ってことはないし、怖かったりもするけれど、魔女をやっつければそれだけ大勢の人が助かるわけだし、やりがいはあるよね。」と述べており、この言葉からも誰かの役に立っている自分に自信を持っていることが分かるだろう。

こうしたまどかに対して、ほむらにとっての「自己否定」克服のきっかけは、まどかという人間が自分の存在を理屈抜きに肯定してくれることだった。このことを示すため、以下に『TV版』第10話の内容を紹介する。『TV版』第10話は、ほむらが最初に経験する時間軸でのストーリーを描いている。ほむらは病気のため長期間の入院をしていたが、それを終え、まどかの通う見滝原中学校に転入する形で徐々に学校に通い始めることになる。久々の学校という環境に戸惑っていたほむらに声をかけたのが、この時間軸では既に魔法少女となっているまどかだった。

まどか「私、鹿目まどか。まどかって呼んで！」

ほむら「え？そんな…」

まどか「いいって。だから、私もほむらちゃんって呼んでいいかな？」

ほむら「私、その…あんまり名前と呼ばれたことって、なくて…。すごく、変な名前だし…」

まどか「えー？そんなことないよ。何かさ、燃え上がれー！って感じがかっこいいと

思うなあ。」

ほむら「名前負け、してます。」

まどか「うん？そんなのもったいないよ。せつかく素敵な名前なんだから、ほむらちゃんもかっこよくなっちゃえばいいんだよ！」

最後のまどかの台詞の直後、自信のない自分を理屈抜きに肯定されたほむらは少しハッとした様子を見せており、ここに自己否定からの脱却の可能性が示されている。ところがその後、ほむらが久々の学校の授業についていけず苦勞する描写がいくつか挟まれ、ほむらは自己否定を更に強めてしまう。ほむらが先の会話のまどかの台詞を回想しつつ、「無理だよ...私、何にもできない。人に迷惑ばかりかけて、恥かいて。どうしてなの...？私、これからもずっとこのままなの？」とモノログを綴っているとその瞬間、ほむらは「魔女」の結界に囚われてしまい危機に陥る。するとそこに魔法少女に変身したまどかが現れ、ほむらは間一髪で難を逃れた。この、まどかによって自分を無条件に肯定され、更に命まで救われたというほむらの経験は、ほむらが抱えていた自己否定の克服の糸口になったのだ。

その後、第3章で述べたようにまどかは単身で「ワルプルギスの夜」に挑み戦死する。まどかの遺体を前にほむらは「どうして...？死んじゃうって、わかってたのに...。私なんか助けるよりも、あなたに、生きててほしかったのに...。」という思いを吐露し、時間逆行をしてまどかを守るために魔法少女になる決断をする。ここから分かるように、ほむらにとって魔法少女になることとは、まどかのように自己愛に直結するものではなく、自分に自己愛を獲得する契機を与えてくれたまどかを守るための手段でしかないのである。また、この決断により「まどかを守る」ということが何よりも重要な信条となったほむらは、まどかを守ることによってしか自己肯定をすることができなくなってしまったのである。

以上から分かることはすなわち、魔法少女システムという象徴界的なものによって自己愛を獲得し得るまどかは象徴界志向の共感を強く持つのに対し、まどかという一人の人間に自己愛獲得の契機を見出したほむらは現実界志向の共感を強く持つようになったということである。これはつまり、まどかとほむらが自己愛を獲得するきっかけが異なっていた時点で二人の共感のすれ違いは始まっていたことを意味しており、『叛逆の物語』で仄めかされた二人の衝突の可能性は物語の最初から見えていた必然的な結末であると考えられるのだ。

5.8 まとめ：結論と今後の展望

本研究では、「『まどマギ』とはどのような物語で何を描いた作品だったのか」という問いについて考察してきた。ここまでの議論を踏まえるとその答えは、「『まどマギ』は、象徴界的理想に対する共感と現実界的存在に対する共感という二種類の共感のすれ違いを主題としており、その解決の難しさを、双方を両立させた結果の不安定さを描くことによって逆説的に示した作品である。」と結論づけることができる。

ここで第3章の議論を振り返ると、「きみとぼく」という関係性に閉じこもり二人の共感が双数的関係に内閉するという「自意識」を軸としたセカイ系の構造は、上記で明らかにした『まどマギ』の構造とはやはり大きく異なっているということが分かる。このことは、第

3章で述べたような両者の相違点をより詳細に、根源的に説明していることになるだろう。以上をもって、『まどマギ』はセカイ系の要素を持ち合わせている作品ではあるが、その要素は本作において重要なものではなく、むしろその点からセカイ系として見ることは「二種類の共感」という本作の軸を見失わせることに繋がるということが明確となった。

ところで、第2章で紹介した通り『まどマギ』はまだ完結しておらず、現時点で既に『叛逆の物語』の続編にあたる映画『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ 〈ワルプルギスの廻天〉』（WEB サイト②）の制作が決定している。次作以降もまどかとほむらの物語がどのように続くのかを注視し、そこで描かれる共感の在り方を考察し続けることが本研究の今後の展望であるとして、これを本論の結びとする。

注

¹ 最も有名な例の一つとして、『TV版』の第3話終盤で主人公の頼れる先輩であった巴マミというキャラクターが、大きな怪物に首から上を丸齧りされて死ぬというグロテスクなシーンがある。このシーンが視聴者に与えた印象は強烈なもので、首から上を失って絶命する様子を「マミる」と表現するインターネットスラングの誕生にまで繋がった程であった。

² キュゥベエの正体は感情を持たない地球外知的生命体であり、目的は宇宙の存続のためのエネルギー回収。感情をもつ人間（少女）は使い捨てのエネルギー源でしかなかった。

³ キュゥベエによって「魔法少女としての潜在力はね、背負い込んだ因果の量で決まってくる」と説明されるが、原理の詳細の解説はない。ただし一例として一国の女王などは因果が集中しやすいという趣旨の説明は為されるため、「その人物が世界にどれほどの影響を及ぼし得るかによって決まる」といったイメージが適切かと思われる。

⁴ 「円環の理」により魔女の存在が消滅した世界でも人間のもつ呪い・絶望自体は消えず、「魔獣」という形で具現化しており、魔法少女の新たな敵となっていた。

⁵ 魔女は「結界」と呼ばれる固有の空間を作り出す能力をもつ。「円環の理」

⁶ 定義が仮定の段階でセカイ系と『まどマギ』との比較を試みるのは飛躍に思われるかもしれないが、ここで仮定する定義は東や前島らによる議論を踏まえたものであり、かつ私が以下で行うのは彼らの議論を基盤として展開された“『まどマギ』をセカイ系と重ねて論じた先行研究”に対する批判であるため、齟齬は生じない。

⁷ 『スマガ』はゲームメーカーのニトロプラスから発売されたアダルトゲーム（美少女ゲーム）。主人公（プレイヤー）は何度死んでも記憶を保持したまま生き返ることができるという能力をもつ。

⁸ 魔法少女になる際に生み出される、物質化した魂。ソウルジェムに負の感情（呪い）が蓄積することを「ソウルジェムが濁る」と表現する。

⁹ まどかの改変によって世界から魔女は存在しなくなったが、魔法少女が抱える呪いや絶望が消えるわけではなかった。「円環の理」の作用についてマミは「希望を求めた因果が、この世に呪いをもたらす前に、私達はああやって消え去るしかないのよ。」（『TV版』第12話）と説明している。

¹⁰ 本作の物語は複数の時間軸に跨って展開されるため単純な時系列では表現しきれない部分があるが、ここでは基本的にはほむらが体験した流れ（『TV版』第10話→第1～9話→第11、12話→『叛逆の物語』）を一つの時系列として捉えて考える。

¹¹ 『TV版』第10話に登場するまどかが魔法少女になる際に叶えた願いの内容は、シリーズ本編（『TV版』、『叛逆の物語』）では明かされない。

参考文献

- 東浩紀、2007、『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン 2』 講談社。
- 宇野常寛、2011、『ゼロ年代の想像力』 早川書房。
- 宇野常寛、2011、『PLANETS SPECIAL 2011 夏休みの終わりに』 第二次惑星開発委員会。
- 片岡一竹、2019、『新疾風怒濤精神分析用語辞典』 戸山フロイト研究会。
- 斎藤環、2011、「まどか☆エチカ、あるいはキャラの倫理」 山本充『ユリイカ 2011年11月臨時増刊号 総特集=魔法少女まどか☆マギカ 魔法少女に花束を』 青土社 39-51。
- 志水義夫、2017、『魔法少女まどか☆マギカ 講義録—メディア文藝への招待—』 新典社。
- 新房昭之、2011、『魔法少女まどか☆マギカ』 毎日放送。
- 新房昭之、2013、『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ [新編]叛逆の物語』 ワーナー・ブラザーズ映画。
- スラヴォイ・ジジェク、鈴木晶、2008、『ラカンはこう読め!』 紀伊國屋書店。
- 高橋しん、2000-2002、『最終兵器彼女①～⑦』 小学館。
- 前島賢、2010、『セカイ系とは何か ポスト・エヴァのオタク史』 ソフトバンク新書。
- 向井雅明、2016、『ラカン入門』 筑摩書房。
- WEB サイト①、アニメ!アニメ!、2014、「「劇場版 魔法少女まどか☆マギカ」興収 20 億円超え 深夜アニメから初の大台」(<https://animeanime.jp/article/2014/01/07/16977.html> 2022.12.7 アクセス)
- WEB サイト②、アニプレックス、「劇場版 魔法少女まどか☆マギカ 〈ワルプルギスの廻天〉」(<https://www.madoka-magica.com/> 2023.1.1 アクセス)
- WEB サイト③、animate Times、2011、「『魔法少女まどか☆マギカ 1』 Blu-ray が TV アニメ 作品史上最高記録の初動売上達成」(<https://www.animateimes.com/news/details.php?id=1304680054> 2022.11.11 アクセス)
- WEB サイト④、HMV&BOOKS online、「魔法少女まどか☆マギカ Blu-ray Disc BOX 【完全生産限定版】」(https://www.hmv.co.jp/artist_%E9%AD%94%E6%B3%95%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%BE%E3%81%A9%E3%81%8B%E2%98%86%E3%83%9E%E3%82%AE%E3%82%AB_00000000544228/item_%E9%AD%94%E6%B3%95%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%BE%E3%81%A9%E3%81%8B%E2%98%86%E3%83%9E%E3%82%AE%E3%82%AB-Blu-ray-Disc-BOX-%E3%80%90%E5%AE%8C%E5%85%A8%E7%94%9F%E7%94%A3%E9%99%90%E5%AE%9A%E7%89%88%E3%80%91_5589583 2023.1.4 アクセス)
- WEB サイト⑤、アニプレックス、「魔法少女まどか☆マギカ SPECIAL 魔女図鑑 薔薇園の魔女」(<https://www.madoka-magica.com/tv/special/dic/card2.html> 2023.1.4 アクセス)
- WEB サイト⑥、ニコニコ生放送、「ニコ生 PLANETS 増刊号 徹底評論「魔法少女まどか☆マギカ」」(<https://live.nicovideo.jp/watch/lv47398722> 2023.1.1 アクセス)
- WEB サイト⑦、伊川佐保子、2011、「「まどか☆マギカ」対「フラクタル」 ゼロ年代を経てつくられた2つのアニメ」、ニコニコニュース (ニワンゴ)

(<https://news.nicovideo.jp/watch/nw59946> 2022.12.4 アクセス) [⑦は⑥の内容をまとめたもの。引用文言は⑦による。]

WEB サイト⑧、ニコニコ大百科、「セカイ系」

(<https://dic.nicovideo.jp/a/%E3%82%BB%E3%82%AB%E3%82%A4%E7%B3%BB> 2022.12.4 アクセス)